

さぶちゃん 奮戦記

63

菅原工務店創業物語

決断と試練 a

仕事は、高橋喜一社長が広い人脈で新たに請け負い、上棟式には振舞酒が配られ職人には金一封がでた。それも一人前を渡されるようになった。しかし、さぶちゃんは親譲りでアルコール類は一滴も口にできなかった。車は運転できるが、バスなどに乗せられると車酔いをした。

大工という二升酒(一・八福)を呑む「のんべい」といわれたが、お酒の修業は兄弟子のように上達しなかった。きょうだいで呑めるのは次兄洋光さんだけ。長兄政利さんとさぶちゃんは父親のDNAを受け継ぎ下戸にちかい。また、上棟式でのお祝いの金一封は使わず両親に持参し、おみやげがわりに渡していたという。

「弟子入りしたてのころ、コップ酒を配られました。匂いをかいただけで具合が悪くなりました。大半の大工は酒豪ですが、わたしの親父も酒に弱かったので遺伝したのでしょ

う。呑むようになったのは還暦すぎからで、同級会など心をゆるせる仲間とちょっとだけ口にするケースが多いですけどね」

父親のDNAのお陰でアルコールにからむ問題はこれまで一度もないという。酒もため、パチンコ、マージャン、競馬など賭けごとなどのギャンブルはいっさいやらずにすごしてきた。また、嗜好品のたばこも吸わない。成人しても大人の世界には染まらなかった。

職人は建築主との受注取引以外、大半は肉体労働となる。少し疲れると「たばこ休み」と称して一服休憩があたりまえ。さぶ

酒、たばこ、賭け事はせず

ちゃんはたばこを吸わなかったが、聖人君子ぶらずに同僚と行動をとにした。現代は午前と午後に分けた10分間の休憩が義務づけられているが、当時は昼食の1時間休憩が常識だった。

善し悪しは別として、嗜好品やギャンブルに手を染めず純粋にそだったことが善良な道突き進むみちびきとなった。

酒を呑まないで眠れない、たばこを吸わないといらつく、パチンコに興じないと精神不安定になる…などなど理屈をならべて自

分の嗜好、欲求を満たそうとする。これは自分に甘く制御機能が麻痺し、高齢化とともに増進するケースもある。

酒もたばこも、いわゆる貧乏のどん底からはいあがることもがき、苦しんだ者は嗜好品、ギャンブルどころではなかつ

た。ギャンブル依存症は、これも我慢できない忍耐欠如のわがままといえよう。

入植時の開拓地の生活は貧困と飢餓、電気が引かれる以前はランプの明かりがたよりの暗い生活だった。それでもさぶちゃんが物心ついたころは、掘って建て家に電灯がともっていたという。

唯一の息抜きは一カ月に一度の休日里帰りし、家族といっしょにテレビを見てすごすことだった。

「わたしのうちは、田畑の耕作をしまし



高橋工務所の慰安旅行。後列右から二人目が高橋社長、中列右端が奥さん。さぶちゃんが撮影

たが、肥育と酪農の畜産飼育もし、多角経営をしていたことになりました。学校にいき、クラブ活動で夕方帰っても、まだ乳牛の乳搾りをしていました。それを三十分ほど手伝うと小遣いがもらえました」

懐かしい思い出のひとつだった。乳牛の乳搾りは、大工仕事とおなじで簡単なようで難しい。乳牛はとても神経質な動物で人間を見分ける能力があった。

自動搾乳機械ができる以前は手でしぼった。乳牛は飼い主と世話をしてくれる顔見知りには素直に乳搾りをさせるが、まったくの他人にはいやがり、後ろ足で蹴って抵抗するほど繊細な神経をしていた。そうすると、乳の出が悪くて苦戦するという。△伊藤▽